

【資料】

## 宗像郷土館の変遷

平松秋子・花田勝広

### 1. まえがき

宗像市は福岡市と北九州市の中間に位置する人口九万四千余人余りの地方都市である。

近年の市町村合併により2003年4月より宗像市となった旧玄海町は玄界灘に面した海辺の町で歴史も古い。その中で宗像大社には国宝8万点を収蔵する「神宝館」が、また日本海海女の発祥地として名高い鐘崎には「民俗資料館」があり、そのまま宗像市の施設となり現在に至っている。

宗像市では高度成長期の頃から両市のベッドタウンとして開発が進み、文化財調査のための発掘が盛んに行われた。古代から神郡として繁栄した地域でもあり、数多くの遺跡の存在が明らかになった。だが、出土した遺物は報告書作成後収蔵倉庫に保管されたままになっている。未だ歴史系博物館相当施設や類似施設がないのである。

しかし、宗像市が文化施設の育たない不毛の地であったのか、いやそうでは無い。その昔「宗像郷土館」があった。

### 2. 宗像郷土館

「宗像郷土館」とは現在の宗像高校の前身、宗像高等女学校の正門西側にあった郷土資料館の名称である。昭和13年から40年頃まで存在したというが現在建物は残っていない。

宗像市には市町村合併により2003年4月（平成15）に宗像市となった旧玄海町に国宝およそ八万点を収蔵する宗像大社「神宝館」が、また海女の発祥地として名高い鐘崎には「民俗資料館」があるが歴史系の博物館相当施設や類似施設はない。

その昔宗像に、当時の地方の資料館としては他に類を見ない立派な資料館が関係者や地域住民の熱意によって建設されたという。次の写真は開館当時、昭和13年のものである。（図1）



図1 完成当時の郷土館

### 3.建設への動き

1932年（昭和7年）6月に宗像郡東郷町の宗像高等女学校に赴任した田中幸夫（1901～1982）が授業の合間をみて郡内の各地で土器、石器、文献資料を収集したことに始まる。これらの考古資料は空き教室の2教室を埋めるほどになった。田中幸夫はこれらの調査報告書を『考古学』、『考古学雑誌』に投稿するという行動力のある人であった。

1936年（昭和11年）田中幸夫は『宗像の旅』（図2）を出版し、その収益金を郷土館の建設を条件に許斐仙太郎校長に寄付した。この申し出について同校長は宗像町村会代表者中村堅太郎に相談し、その結果「貴重な郷土資料が集められていることは神郡宗像（古代、宗像大社の神領）にとっても非常な喜びである」。と、その保存方法について検討することとなった。

さらに話を聞いた宗像高等女学校後援会や学校当局から、これまでのように教室を収蔵庫として図使うのは不便であろうから是非保存のための施設を

という熱心な希望が出され、昭和11年7月第1回発起人会の委員会が開かれた。その後建設計画と



図2 「宗像の旅」昭和11年発行  
花田勝広 蔵

当初予算が決まり、建物も火災や盗難を防ぐため木造から鉄筋へと計画変更された。郡内外の有志に建設趣意書が配られ、賛助者から寄付金を募った。遠く台湾、朝鮮、中国からも寄付金がよせられ458名にもなったという。また、建設資金に当てるため酒井雲一座の興行が2日間にわたって行われ、（一座の中に後の村田英雄もいた）このほか有志による樹木や展示品の寄贈もおこなわれた。

昭和11年10月の建設趣意書には次のような内容がある。

#### 郷土館建設趣意書

宗像高等女学校に於いては、神郡宗像三千年の光輝ある歴史に着目し、皇国の為、将又郷土宗像の為に将来の宗像を建設すべき人材教養の一資たらしめんと、ともすれば散逸せんとする郷土教育資料の蒐集に専念しつつ、有之候は誠に時宜を得たるものにして、郡民として同慶…。今其の実際を見るに…その数別紙目録の如く二千四百余点…。然るに之等貴重品の陳列状況、並に保管方法、及至利用上の諸点よりみるに…狹隘言語に絶し、且は火災盗難の危懼又少なからず…。

「抄」「**習**形」より

建設委員には南郷、上西郷、吉武、河東、神興、勝浦、田島、池野、岬、大島の各村長、そして東郷、神湊、赤間、福岡、津屋崎各町長と宗像女学校後援会代表者の名前がある。

この時代の日本の社会情勢は次のようであった。昭和12年7月、日中戦争が始まり13年4月国家総動員法が発令され、同じく灯火管制規則が実施されている。宗像では昭和11年1月東郷警察署で改築庁舎が落成。同年6月宗像郡観光協会の創立発会式が行われ、同じく12月東郷町の常設キネマ館、東宝館が開かれ、昭和12年1月貴族院多額納税者議員に出光佐三氏が選出される。（郷土館へ多額の寄付）。また、戦勝祝賀旗行列が東郷橋を渡る写真が残されている。同年7月には宗像高等女学校が断髪禁止令を決めた。（むなかたの年表より）

このような状況のなかで昭和13年12月5日宗像郷土館と付随する郷土会館が落成した。

郷土館建設の過程は次のとおりであった。（表1）

年 月	項 目	備 考
昭和11年		
2/10	宗像の修収益金寄附	収益金 300円 (2500部)
5/6	中村氏 陳状	許斐氏→中村氏へ
7/4	郷土館建設計画の決議	予算 6,000円
7/11	発起人会	
9月	郡町村会代表へ賛助	
10月	趣意書の発送	予算変更 15,000円 500発送
11月	賛助協力の原 開始	九州・朝鮮・大阪・東京へ
昭和12年		
3~5月	用地買収	(許斐氏死去)
6月	仮地鎮祭	
6/18	建設変更書の発送	予算変更20,000円 (賛助100名あり発送 16,000円集まる)
9月		
10/11	地鎮祭 起工	
12/14	経過報告	「全国中学校における日本一の郷土館」から「地方1郡が持てる全国屈指の郷土館」へ変更
昭和13年		
1/16	賛助懇請状	発送
2/21・22	『酒井 雲一庵』興業	純収益金400円寄附
2/28		寄附徴集書の発送
4/29		賛助・送金懇請状の発送
5/17	禮礼を上げる	
6~7月	郷土会館の用地買収	
9/5	郷土会館の地鎮祭	
11/13		落成記念案内の発送
12/5・6	郷土館の落成式	
昭和14年		
4/2		「官形」の入稿
4/18	残部委員会	
5/22	「官形」発刊	
6月	田中幸夫氏厚羽高女へ社任	

表1 宗像郷土館建設日程 \*委員会・建設委員会は除く

#### 4.宗像郷土館の始動

昭和13年12月5日、落成式は盛大に行われ、官民有志六百数十名が列席したとある。郷土館建設に伴う一連の行事のまとめとして昭和14年5月に田中幸夫の編集により『**官形**』が出版された。(図3)

その内容は、次の通りである。(主要なものについて**官形**より抜粋)

[落成式]  
落成式式次第

[報告]  
会計報告  
賛助者名芳名  
資料目録  
郷土館建設日記抄

[感想]  
宗像郷土館を拝観して 大阪 生駒吉之助  
『考古学上より観たる古代むなかたの文化』田中幸夫

[付録]  
宗像人物誌

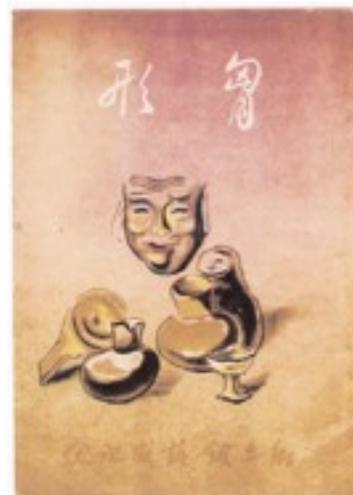


図3 「官形」 昭和十四年発行 花田勝広 蔵

開館に至るまでの行事が詳細にわたって書かれている。例えば関係者感想文には次のようなものがある。

#### 宗像郷土館を拝観して大阪 生駒吉之助

落成式開館を目の前に控へ、準備殆どなれる宗像郷土館を訪れましたのは去年十一月廿七日、氣持のよい、ほんとうの小春日でした。日曜日にも拘わらず田中先生は申上ぐるまでもなく、中村委員長始め和田校長先生、石松郡農會長、其の他諸先生にお挨拶申上げる榮に浴し、洵に有難い仕合せに存じました。早速皆様に郷土館を案内され、田中先生の息もつかせぬあの懇切なる御説明に聞き入りました。その折感 じましたことの二つ三つを申しあげませう。

##### 第一 田中先生の非凡の力

なんと申しまして、先づ一番に先生の努力の神秘的力が如何に大なるかに私は唯驚かされました。…

##### 第二 説明記録の完成

先生に一々御説明して頂き、以て初めてあの一石一個、あの貝殻一枚、或いは古い虫の喰うふた書の一片が夫々生きて私共の眼にはいりますが、若し先生お留守の節は誰も解らないでは實に心細い話であります。是非共、早く詳細な説明書を作成せらるゝことを祈ります。

##### 第三 外観の美

形は精神を生みます。宗像には勿體ない程充實したる内容と相俟って外観の美も實に態よく整ひ、時代に相應はしい落着きのある設計の建物。…。「抄」

郷土館の概要は、敷地220坪、建坪54坪、建築様式は鉄筋コンクリートで寢殿造り、平屋建てとある。

建設費の内訳は次のとおりである。(表2)

現在評価額は1995年当時のものであるから、2008年現在では、当時およそ1億7千万円であった金額よりはるかに多いものになる。

総額 32,964円52銭 当時（昭和13年） 169,976,000円 現在評価額			
支出内容			
種 別	経 費	経費（現在）	内 訳
建設費用	16,249円	43,200,000円	(坪)800,000円 × 54坪 = 43,200,000円
用地代	2,827円	99,000,000円	(坪)450,000円 × 220坪 = 99,000,000円
陳列棚備品	2,849円	27,776,000円	13,888円 × 2,000倍
印刷募集費用	1,610円		
印刷通信費	343円		
胃 形	590円		
そ の 他	8,496円		
合 計	32,964円	169,976,000円	

表2 郷土館建設費の内訳

上記「胃形」では、昭和14年3月現在での内容が資料目録として38ページに渡って記載されている。

1493点の資料について、10の部門別に、「品目」、「寄贈者氏名」、「出土地」が明記されている。表3は部門ごとに点数を示したものである。展示品のラベルと台帳も残っている。(図4)

部門	種 別	点数
第1門	先史原始時代遺物	523点
第2門	歴史時代遺物前期	48点
第3門	歴史時代遺物後期	59点
第4門	古文書	159点
第5門	先哲・遺芳	212点
第6門	写真	53点
第7門	図書	301点
第8門	参考品A	42点
第9門	参考品B	20点
第10門	委託品	76点
合 計		1,493点

表3 資料表

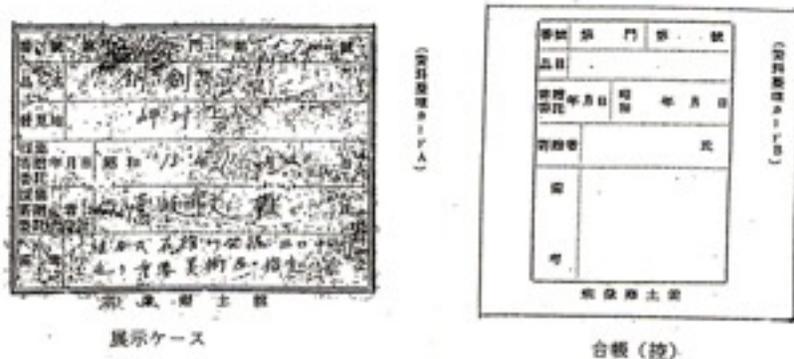


図4資料整理カード

このようにして昭和13年12月宗像郷土館は開館し多くの人々の注目を集めた。「芳名帳」には参観者名簿が掲載されている。それは下記の通りである。(表4) 明治5年に開館した現在の東京国立博物館の前身である東京帝室博物館の後藤守一をはじめ著名な人々が訪れた。

また昭和13年に発行され、当時の郷土館の内部を知る唯一の資料である「郷土館絵はがき」が残っている。(図5)

芳名帳		郷土館参観者	
後藤 守一 (東京帝室博物館主任研究官)	平光 新一 (九大 教授)	山本 暲 (福岡女専 教授)	
大場 磐雄 (福岡県立大教授官内務課長)	鏡山 猛 (九大 講師)	戸上駒之助 (福岡 同 市)	
杉山 繁男 (史前学研究者、東京)	長瀬 賢海 (九大 教授)	宗佐 健三 (明治専門学校 校長)	
森本 六郎 (東京古物学会 主幹)	春日 政治 (同 同)	藤田 亮東 (京博 副 長)	
守屋 孝藏 (古蹟研究家、京 都)	鈴木清太郎 (同 同)	金田 平一郎 (九大 助 教)	
小林 行雄 (京都帝大考古学専攻)	三田村 一郎 (同 同)	太田 光次 (福岡 同 書 館 長)	
三浦 定男 (同 同)	舟橋 諒一 (同 同)	寺田 貞次 (高松 同 高 校 教 授)	
坂本 経亮 (熊本縣考古学会 員)	小川 善二 (東京高等農林学校 校長)	梅原 栄治 (京大 大 教 授)	
七田 忠志 (平塚考古学会 員)	松本 唯一 (明治専門学校 教授)	森 貞成 (東京帝室博物館 館 長)	
小林 久雄 (熊本考古学会 員)	清水 芳太郎 (九州日 報 社 長)	岡部 宗枝 (福岡 同 同 館 長)	
中山 平次郎 (九大 名誉 教授)	下條 儀敏 (福岡女 専 教 授)	志平 環 (豊後 同 同 館 長)	
竹岡 勝也 (九大 教 授)	北西 龍太郎 (同 同 同 同)	山口 麻太郎 (豊後 同 同 館 長)	



図5 「福岡県宗像高等女学校郷土館内の一部」  
絵はがき 花田勝広 蔵

表4 芳名帳 (郷土館参観者)

田中の業績を表す宗像地域に関する執筆論稿は下記の通りである。

番 号	題 目	誌 名 ( 単 行 本 )	年 月
1	筑前遠賀郡立屋敷の遺跡	考 古 学	昭和 7年 9月
2	筑前立屋敷遺跡の弥生式土器文様	考 古 学	昭和 7年 2月
3	弥生式有文土器の新遺跡と窯址	考 古 学	昭和 8年11月
4	鐘崎貝塚と猪	神 考	昭和10年 1月
5	筑前宗像郡約川床の遺跡	考 古 学 評	昭和10年 1月
6	古代宗像民族と東郷	神 考	昭和10年 2月
7	筑前沖ツ宮の石製模造品	考 古 学 雑 誌	昭和10年 2月
8	筑前宗像発見の祝賀馬	考 古 学 雑 誌	昭和10年 7月
9	筑前鞍手法蓮寺の経筒	考 古 学 雑 誌	昭和10年 8月
10	玄海の秘島沖ノ島に詣でて	神 考	昭和10年10月
11	北九州の縄文土器	考 古 学 雑 誌	昭和11年 7月
12	投弾型土製品について	考 古 学 雑 誌	昭和11年12月*
13	筑前香葉の弥生式遺跡	考 古 学 雑 誌	昭和12年 1月
14	宗像郷土館について	宗 考	昭和12年11月
15	官幣大社宗像遷津宮と祭祀遺跡	考 古 学 雑 誌	昭和13年 1月
16	沖ツ宮をたずねて	北 九 州 郷 土 史	昭和13年 1月
17	筑前宗像郡稲元発見の経筒	考 古 学	昭和13年 3月
18	宗像郷土館の窓によりて	宗 考	昭和13年 7月
19	郷土館と山平	宗 考	昭和16年 3月
20	日本人は死んだ―廃墟の宗像郷土館	ふる 里 の 自 然 と 歴 史	昭和54年 4月

\* 引用文献 九州歴史資料館『田中幸夫寄贈品目録』昭和57年

\* 郷土館設立委員会

表5 雑誌執筆論稿（宗像地域関係）

## 5.その後の郷土館

開館翌年、昭和15年6月田中の浮羽高等女学校転任、16年の太平洋戦争の始まり、20年の終戦、戦後社会の混乱や学制改革（昭和22年～25年）による宗像高等女学校の消滅などの事情が重なり、郷土館は管理者のいないまま放置された。ガラス張りの天井部はむざんに破れ骨董的価値のある物は盗まれ荒廃をきわめたという。この廃屋を鹿児島線の上り列車の車窓から目にした田中幸夫は大変悲しみ、次のような文章が残されている。「日本人は死んだ 廃墟の宗像郷土館」『ふるさとの自然と歴史』 第95号 1979年発行

戦後の日本人の意識を鋭く見つめたユダヤ人宣教師、マービンの著書「日本人は死んだ」を引用して、開館祝賀式での意気高揚とした人々と日の丸の旗の波との風景を、廃墟の郷土館に重ねて、先人達の郷土を愛する心から始まった宗像郷土館のなれの果ての姿に悲嘆した。そして、再び宗像に立ち寄られることはなかった。

## 6.郷土館の再生

宗像郷土館の建物は崩壊の一途をたどったが、残された資料の重要な価値に気づいた人々によって整理が行われた。

1期は、1965年～1975年で、宗像高校に赴任した正木正三郎が退職するまでの10年間である。正木正三郎は荒れ果てた郷土館を見てまわり小田富士雄に相談。すべての資料を空き教室へ移管し、郷土部の生徒で洗浄、分類を行った。正木正三郎の回想によると、資料委託者が返還要求し引き取られる事態もあった。そして空き教室の窓ガラス、陳列ケースが破られる事件が続発し1972年、正木正三郎の許可を得て花田勝広が見学した時には破れたガラス窓に悲惨な感じを受けたが、資料は丁寧に保管されていたという。

管理に行き詰まった正木正三郎は九州大学の岡崎敬教授に会い資料の重要性を説かれ叱咤激励されたということである。その後宗像高校郷土部も休部になり、清掃する人もなく寂寥感がただようほどであった。

正木正三郎は1975年の退職の再重要な物品について九州歴史資料館へ保管を依頼した。このことを新聞報道で知った人々が宗像町議会へ働きかけて資料の所有権が宗像高校に移ったことには、自分たちの郷土を誇りに思い文化を守り伝えようとする人々の心意気を感じる。

郷土資料の散逸を免れたことは学校当局、教師、郷土部生徒の無償の奉仕であった

2期は1981年～1984年 宗像高校教諭占部玄海・中尾徹によるものである。

資料の置かれていた教室を再度整理して『形』の目録と資料を確認して1点ずつ写真に納めた。これが1984年発行の「宗像高校視聴覚ホール・郷土資料図版・目録」で、収蔵資料のすべてが明らかになった。考古資料を福岡教育大学で追跡調査を行った中尾徹が、また古文書等を占部玄海が担当し費用は占部玄海の自費出版であった。郷土歴史研究会の協力もあったという。

1988年 宗像高校70周年事業として同窓会館・四塚会館が完成した。今日まで3階展示室に郷土館の資料が収蔵、展示されている。

3期は1992年～1994年に花田勝広・鎌田隆徳による整理である。東郷・田熊・釣川遺跡の遺物実測・出土品の照合・出土地点の聞き取り調査を開始した。『視聴覚ホール目録』・『形』目録・田中幸夫論文『弥生式土器集成』を手がかりに出土地点の確認できる物から実測を始め、そして寄贈者の子孫の追跡、聞き取り等によって資料の確実性を高めていく方法がとられた。

その後の追跡調査の結果、1995年に銅剣、銅戈の実測図を発見、2006年に畦

町遺跡を再発見した。

この郷土館は、開館してから9年、再生作業に23年、追跡調査に11年の歳月を費やした結果、8割の資料が再生し、2割の資料が出土地不明であることが判明した。

博物館の閉館は、資料とその価値をも失うことにつながる。

2008年9月、筆者は宗像高校四塚会館の3階にある展示室を訪れた。建物の外にはまだ夏の強い日差しが残り、遺物に当たると良くないと思いカーテンを閉めたまま見学させて頂いた。陳列ケースの中で静かに並んだ土器や勾玉の「会えてよかった」という声が聞こえたような気がした。

## 7.田熊石畑遺跡の発掘調査

平成20年7月、宗像市文化財係によって発掘調査が行われていた田熊石畑遺跡の内容が新聞各社によって報道され、関係者や考古学ファンの熱い視線が向けられた。（電子博物館でも8月20日 「発掘現場から緊急レポート」の記事を新着情報に掲載）

くしくも75年前の昭和8年、宗像高等女学校の新運動場の拡張工事にともなつて、田中幸夫による宗像における最初の遺跡調査が行われ、多くの遺構や遺物が眠っているとされた地である。

現在までの調査で青銅器が15本も発見され倉庫群なども発掘された。カメ棺文化圏に入らない宗像で大量の青銅器が出土したという事実は、弥生時代に宗像にも有力な首長がいて豊かな文化を築いていたということが明らかになった。広大な敷地は今も発掘が続いている。



田熊石畑遺跡の発掘現場（平成20年9月平松撮影）



旧3号線沿いに今も残る宗像郷土館入り口の御影石の石柱。  
この奥が田熊石畑遺跡の発掘現場である。（平成20年9月平松撮影）

宗像郷土館の開館から現在までを見てきた。

文化の継承はときには力強く擁護され、時にはむなしく放置されることもあった。しかし現在は、過去の教訓を生かし二度と散逸させてはいけないという動きの中にあり、りっぱな郷土資料として教育に活用されることが望まれる。「むなかた電子博物館」もこの役割を担っていくべきである。（文中敬称略）

引用参考文献

- ・ 九州歴史資料館「田中幸夫寄贈品目録」 1982
- ・ 田中幸夫 「**骨**形」 宗像郷土館建設事務所 1939
- ・ 花田勝広 「田中幸夫と宗像郷土館  
宗像郷土館郷土資料調査報告」宗像考古刊行会 1995

（平松 秋子：宗像歴史を学ぼう会）

（花田 勝広：日本考古学協会会員 文学博士）